



「86歳にして、初めて(?)の誕生日。あ～長生きして良かったなあ・・・」と、感激して涙を流されていた。

photo 藤田佳久

「ここは、最後に生き抜くところなんだね」

堀 千代・文
函館おしま病院
ホスピス病棟看護師長



福岡市出身。順正高等看護専門学校(岡山県)卒業後は岡山大学医学部付属病院消化器外科に勤務。その後九州で最初のホスピスが開設された栄光病院へ移り、同病院のホスピス病棟で9年間勤務する。平成15年函館おしま病院に赴任。平成16年には道南で最初の認定看護師(緩和ケア)となる。

ホスピス病棟の看護師として働き出して十六年になる。そのころから、今も変わらないのが「ホスピス病棟への誤解」である。

死に行く人が行くところというイメージがあるためか、『病棟がとても暗く重苦しい、鉄格子がはめられている』『莫大な費用がかかる』『(医療行為を)何もしないと』『新興宗教がやっているところ』などである。

十六年前も今でも同じように聞く『誤解』、つい最近入院してこられたAさんも「ホスピスを勧められた時には行きたくないと思っただけで、自分なりにどん

な所か調べてみると、自分が過ごしたいと考えていた場所なのがあった。来てみて本当に良かった」と話して下さった。癌を治す治療はできないが、癌による様々な苦痛の緩和の為に、必要な医療処置は勿論のこと精神的なケアなども積極的にこなしている。

ある家族の方からは「ここは、最後に生き抜くところなんだね」という言葉をいただいた。苦痛の緩和を目指し、その人らしく生きることが目標としているスタッフの関わりが、入院して下さった患者さんや家族からの感想につながっているのだろう。